

プラハ・カドリエンナーレのバックドロップ

——〈PQの背景画〉——

堀 田 充 規

はじめに

20世紀後半、つまり第2次大戦後の舞台芸術の先進国はイギリスやアメリカと言って間違いない。しかし、世界各国の舞台美術家達が4年に一度集う街はロンドンでもなければニューヨークでもない。中欧ヨーロッパに位置するチェコ共和国の首都プラハである。プラハになぜ世界中の活躍する舞台美術家もしくは、それを目指す若者たちが集うのか。それはプラハ・カドリエンナーレが開催されるからに他ならないが、世界中から観客を集めるショービジネスの盛んなニューヨークやロンドンで開催されるなら疑問も湧かなかっただろうが、通称PQ（以下PQ）が開催されるようになって30年以上経て第1回目から変わらずプラハで開催され続けている。

なぜプラハで舞台美術の国際展が開催されるようになったのか、最初に素朴な疑問を持った。

前回PQについて報告を書いたが、今回その要因を探ってみた。

■チェコ・プラハの歴史的背景

◆14世紀の繁栄

地理的に我々日本人の感覚からするとヨーロッパの東のように思いがちであるが、ヴルタヴァ川の浅瀬付近に出来た町プラハは有史以前から様々な場所から人々がやって来ては渡って行く商人の交易の場であった。プラハの東方にはスラヴ人世界が、西方にはゲルマン人世界が広がり民族的にも東西の境界、要衝たる街の条件を揃え、ヨーロッパの東西南北を結ぶ十字路、

軍隊、平和、文化の十字路、ヨーロッパの心臓とも呼ばれた。14世紀ボヘミア王カレル1世が神聖ローマ皇帝カール4世となり繁栄を極め、アルプス以北初の大学であるカレル大学を創設したその頃、ローマについてヨーロッパ第2の都市となっていた。その後疲弊や内乱、何人ものチェコ王の後ハプスブルグ家のルドルフ二世の頃にはプラハは栄光を取り戻し、ヨーロッパの重要都市のひとつとなっていた。

（シェイクスピアの「冬物語」の舞台がチェコに設定されているのも、当時のヨーロッパにおけるチェコの重要性和見てよいだろう。）

◆ドイツ語化の強化とチェコ文化の衰退

しかし、王権が極度に強化され事実上ハプスブルグ家の世襲の属領となり、ルドルフ二世が出した「信仰の自由の勅令」も廃止された。その為プロテスタント系のチェコ人が去り、大量の外国人とりわけドイツ人が入ってきて、チェコのドイツ化が進み、チェコ社会に構造変化が起こった。外国人と外国のものが幅をきかせる当時の風潮と流行。チェコ人貴族もチェコのものが低俗であるように思い、チェコ人であることを恥てチェコ語を軽蔑さえし、チェコ語とチェコ文化の急激な衰退があった。

◆民族復興運動

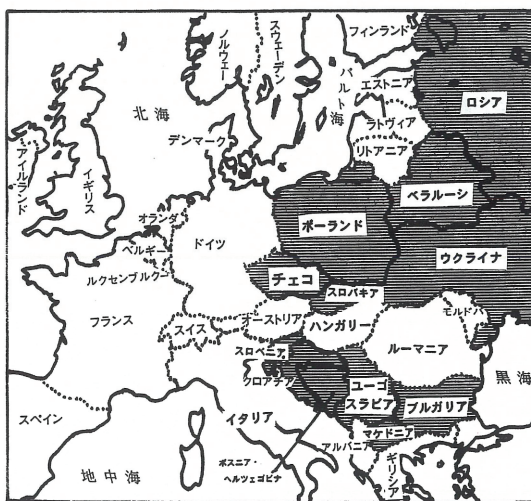
永いハプスブルグ帝国の支配下のもとドイツ語を単一的な公用語・教育言語にしようとした為、衰退したチェコ文化とチェコ人のアイデンティティを取り戻そうと18世紀後半に学者、作家、芸術家、思想家などが「民族復興運動」を始めた。この運動が起こるまで

チェコ語やチェコ文化は永い眠りについて、ドイツ化していたプラハ市民をチェコ化する、つまり言語的に大部分ドイツ化していたのを目覚めさせ、活性化する必要があった。プラハは民族復興運動の中心地となり、チェコ語の演劇や文学の広まりで活性化し、民族意識の覚醒を呼び起こした。そしてプラハが最も輝いた19世紀に繋がるのであった。

◆激動の20世紀

1918年チェコスロバキア共和国建国。独立復興後、マサリク（1850－1937 後述）の共和国と呼ばれた兩大戦間の時代は極めて民主主義的で自由な社会となった。しかし、プラハの輝きはナチスのチェコ侵略で束の間終わる。チェコ人口が95%以上になっていたプラハを「ドイツの古都」と規定し、ドイツ帝国の街に変容させようとした。ナチスによってチェコ語大学やチェコ人の諸機関が廃止されたが、ソ連によって解放、急速にスターリン主義化が進む。そして「プラハの春」の民主化・自由化運動が起こったが、1968年ソ連を中心とするワルシャワ条約機構軍が侵攻。プラハはソ連軍戦車に蹂躪、その後多くの文化人が亡命したり、投獄されたり、地位と職を追われた。しかし、1989年無血の「ビロード革命」によって民主化自由化し、93年にはスロバキアと分離。

プラハはチェコ共和国の首都に帰り咲いた。



■ スラヴ民族国

図1 一 中欧

■音楽と演劇の街の文化的背景

プラハはその地理的位置のために幾多の内乱や他民族の支配下や大戦があったが、奇跡的に中世の街並みを残し世界遺産の街となっている。

現在プラハの街には大小30以上の劇場があり、演劇、オペラ、バレエ、ミュージカル、パントマイム、コンサート、人形劇、ロック、フォークロア、など多種多様に上演されている。

音楽祭は特に5月から8月にかけては最も活発な時期を迎え、「プラハの春国際音楽祭」は世界中からクラシックファンが集まる。コンサートは劇場以外でも行われ、宮殿や教会で室内楽やパイプオルガンなどの素晴らしい演奏が楽しめる。街なかを歩いているとチケットを販売する機会が会場前に出ている、チラシを配る若者達にもよく出くわし手渡される。冬のオペラやバレエシーズンともなれば、チケット購入に並ぶ人達やオペラやバレエのパンフレットを手にした親子連れをよく見かける。

演劇や音楽が日常生活の中に浸透され、身近に親しむ民族性がわかるが、いったいこの演劇、音楽好きの民族性はどこからくるのであろうか。

チェコ・プラハの文化を振り返ってみた。

◆チェコの古い演劇

チェコ演劇は12世紀にラテン語による宗教劇として発生し、13世紀に最初のチェコ語による復活祭劇が上演された。15世紀には宗教劇は世俗化され、それをフス派^{註1}が攻撃、16世紀には学校劇へ移る。その後、ハプスブルグ家の支配下ドイツ化が進み、言葉の迫害を受けてチェコ語は長らく女中や農奴の言葉として、書き言葉の発展を妨げられた。18世紀末の文芸復興期（民族復興運動）の頃までチェコ語の演劇は人形劇とともに農村にだけ上演されるものになっていた。

◆近代の演劇、音楽、そして国歌

18世紀末プラハに恒久的な劇場が出来たが、ドイツ語劇が上演されていた。劇場は商業的により広い階層から観客を集める必要があったが、教養の低い階層はチェコ語しか分からなかった為、チェコ語での上演が

許可されるようになった。18世紀末に最初のチェコ語のオリジナル戯曲が上演された。障害があったが、ドイツ語とチェコ語で交互に上演許可され、プラハ以外の町でもチェコ語による上演が行われるようになった。

民族復興運動によって、チェコ史に題材を取ったチェコ語劇も書かれ、チェコ語劇は文盲の民衆をも含めた広い階層のチェコ人にチェコ標準語とチェコ人の歴史とチェコ文化を広めた。チェコ語演劇はチェコ人の民族意識を高めアイデンティティを取り戻す重要な役割をも果たした。

チェコ語での上演はハプスブルグ帝国内でのチェコ民族の自律性・独立性を求める志向と結びつき、更に政治的な意味合いを強め、チェコ人はチェコ語で自由に上演出来るチェコ民族独自の劇場を望むようになった。

19世紀に入ってヨゼフ・カイェター・ティル(1808-56)ら若い世代が近代劇を樹立、幾多の苦難のあと完成した民族劇場(国民劇場) Národní divadlo はその後チェコ演劇の拠点となった。

音楽界ではスメタナ(1824-84)が活躍したが、彼はドイツ語教育を受けたのでチェコ語がうまく書けず成人してから熱心に勉強し直したと言う。その後ドボルジャーク(1841-1904)やヤナーチェク(1854-1928)が続いた。第1次大戦末期1917年に80年あまり忘れ去られていたティルの戯曲『フィドロヴァチカ』がプラハのヴィノフラディ劇場で20世紀の新しい演出で再演された。その『フィドロヴァチカ』の中で盲目の老人が「わが故郷はいずこ?」(「わが祖国はいずこ」とも訳される)を歌うと観客の胸を打ち、涙を流す聴衆がアンコールを求め舞台と観客が一緒になってこの歌を唱和し、この年70回も上演されたという。^{注2}この頃思想家・政治家であるトマーシュ・ガリッグ・マサリク(1850-1937)を指導者としてチェコ独立運動が展開された。翌年1918年チェコ人は300年ぶりに独立復興し、「わが故郷はいずこ?」はチェコの国歌となって現在に至っている。

◆20世紀初頭—文化の華咲くプラハ

両大戦間はチェコ人以外にも様々な民族が交流し国

際的都市となり、政治経済も栄えた。まさに黄金のプラハにふさわしい活気があった。特にチェコの精神的風土の中で高い文化が生み出され、中でもチェコ学問の華「プラハ言語学サークル」やアヴァンギャルド芸術家集団「デヴィエトスィル」など学問的・芸術的サークルが盛んに活動し、多くの国の文化人たちが交流し活躍した。「デヴィエトスィル」のメンバーで詩人のサイフェルトは1984年にノーベル文学賞を受賞している。また遺伝学のメンデル(1822-84)、精神分析のフロイト(1856-1939)、現象学フッサール(1959-1938)もチェコ・モラビアの出身である。

◆チェコ文学とロボット

近代文学ではフランツ・カフカ(1883-1924)とヤロスラフ・ハシュク(1886-1923)、そしてチェコ人に最も人気のあるカレル・チャペック(1891-1938)らがいる。チャペックの名前を知らずとも「ロボット」と言う言葉を知らない人はいないだろう。これはカレル・チャペックの戯曲『R. U. R.』(ロッセムのユニバーサル・ロボット)1920年の作品に登場し、スラブ語のrobota、賦役、奴隷労働と言った意味からの造語である。(ロボットの単語創案者はカレルの兄、ヨゼフ)『R. U. R.』は全世界からの注目をあび爆発的な人気を呼び諸外国でも次々に翻訳された。数多いチャペック作品の中でも重要な作品で彼の名前を世界的なものにした。日本でも2年後には紹介され^{注3}、さらに2年後には翻訳もされ築地小劇場で上演された。

余談であるが恐らくこの『R. U. R.』(ロッセムのユニバーサル・ロボット)は若かりし頃、演劇に親しんだ漫画家手塚治虫に大きな影響を与えたのではないかと著者は考える。「鉄腕アトム」以前に近未来を描いた「メトロポリス」(2001年映画化)はこのチャペックの『R. U. R.』と同じく人造人間、つまりロボットを登場させているし、予言や警告も似ている。

チャペックは20世紀のチェコを代表する作家で48才で亡くなるまでに純文学小説、SF、推理小説、戯曲、童話、評論、伝記、旅行記、エッセイなど数多くのジャンルに作品を残した才人であった。近年日本でも彼の作品が少しずつ出版されるようになってきている。

その他現代チェコ作家には「存在の耐えられない軽さ」で世界的なブームを巻き起こしたミラン・クンデラがいるが、1975年以降半ば亡命の形でフランスに在住している。

◆3つの由緒ある劇場

プラハを語る上で欠くことの出来ない由緒ある3つの劇場の存在がある。その一つ「等族劇場」(Stavovské Divadlo)は1783年に柿落としされ、ボヘミアの愛郷主義的な大貴族ノスティツ伯によって建てられたものだ。古くからウィーンと並ぶ音楽の都でもあるプラハは多くの音楽家が訪れ、モーツァルトはこの劇場で指揮している。プラハで最も古い劇場であるが、何度も名前を変えている。ノスティツ劇場、王国領邦ドイツ劇場と呼ばれた時期もあり、現在もティル劇場とかエステート劇場などの表示が地図やガイドブックにあって、旅人には複雑だが、チェコ語では Stavovské Divadlo となる。

旧市街のほぼ中心に気品ある石造りの建物として残り、今なおオペラやバレエが上演されている。そしてこの劇場の歴史を語る上で欠くことの出来ないエピソード、それは天才モーツァルトがオペラ『ドン・ジョバンニ』をこの劇場のために書き上げ、彼自身が指揮し初演を果たしたことだ。

この旧市街の劇場の他に新市街のヴルタヴァ川のほとりにある「国民劇場」(Národní Divadlo)の存在がある。「等族劇場」から「国民劇場」が出来た1883年までには長い道のりを要した。

「民族復興運動」によって、チェコ人がチェコ語とチェコ文化の復興に勤め成功するには演劇や音楽が必要不可欠であった。19世紀に入ってチェコ人はチェコ語によるチェコ人のための威厳のある石造りの劇場を望み、「プラハにおけるチェコ民族劇場創設協会」が設立された。

1851年に「民族が己れ自身のために」のスローガンのもと全国的に資金を募り、1881年に劇場はほぼ完成をするが、落成直前に火災に見回れた。しかし、奇跡的にも2年後に再建され、当時の一流の芸術家たちが装飾を施し、スメタナのオペラ『リブシェ』で柿落とし

された。そのクライマックスでリブシェは「私の愛するチェコ民族は滅びないでしょう、恐るべき苦難を立派に克服するでしょう！」と締めくくる。『リブシェ』はチェコ民族のための作品であり、国民劇場はチェコ人のアイデンティティの証しであり、チェコ民族復興運動の記念碑的建物となった。因みにPQの最優秀賞に贈られる像は金色で3頭の馬に引かれた女神の像だが、これは国民劇場の屋根に飾られている女神像と同じデザインのものである。

そして3つ目の劇場、現在の「国立オペラ・プラハ」(Státní opera)は「国民劇場」に対抗して建てられた。ドイツ人がハプスブルグ帝国内のドイツ人から集めた資金によって、ドイツ語でオペラを上演する「新ドイツ劇場」として1888年にオープンした。この劇場も「等族劇場」同様、何度となく名前の変遷を重ね、2次大戦後1945年「5月5日劇場」、49年に「スメタナ劇場」、89年のビロード革命後「国立オペラ・プラハ」となった。歴代指揮者にはマーラー(1860-1911)やセル(1897-1970)らが勤め、プラハを代表する劇場のひとつとなっている。

◆チェコ人形劇の役割

これらの由緒ある劇場のほかにも人形劇専用の劇場も数多くあり、チェコには何百という人形劇団がある。人形劇の歴史は古く中世にはすでに人気が高かったが、19世紀前半に民族復興運動と結びついて発展した。

ドイツ語の支配が強い中、チェコの歴史的な話やプラハで上演された通常の演劇を地方や農村では人形劇で上演された。冷遇されていたチェコ語は農村では息づいていた為、チェコ語による人形劇が各地農村で上演されることによってチェコ人の民族意識を高めた。政治的・社会的意味合いを持ったチェコ語の演劇を伝える手段として、また子供達に教育する目的としても絵本や人形劇は最適で、チェコやスロヴァキアにおいては外国の支配に対する戦いの有力な武器となった。

人形劇はチェコ語を守り続けることの重要な役割の一端を果たした。

コペツキー(1775-1847)やスクーパ(1892-1957)マリク(1904-80)といった人形遣いで有名になった

優れた人材を輩出し、1929年にはプラハに「国際人形劇連盟ウニマ」が結成された。戦後世界的に知られることになった人形アニメーションの第一人者のイジー・トルンカ（1912-69）も元は人形作家で日本でも彼の作品は人気が高かった。また有名な芸術家が人形をデザインしたり、スメタナも人形劇のために作曲もしている。チャペックの「ロボット」も人造人間ゴーレム伝説や人形劇好きな国民性から生まれたのではないだろうか。

このように人形劇はチェコでは民族のアイデンティティと深く関わった重要な文化と誇りであり、プラハの芸術系大学に人形劇科が設置されているのも納得出来る。



・プラハ市街で数多く見られる人形劇公演のポスター
まん中はモーツァルトの「ドン・ジョバンニ」

◆20世紀のチェコ演劇

第1次大戦後、左翼の芸術家達が1925年設立アヴァンギャルド芸術家集団「デヴィエトスィル」運動を起こした。その「デヴィエトスィル」の一環としてホンズル（1894-1953）とフレイカ（1904-52）は第1次解放劇場を組織してチェコ前衛演劇の開花期を迎える。第2次解放演劇はボスコベッツ（1905-81）とベリフ（1905-80）の風刺音楽劇と合流し、演出家ブリアン（1904-59）の活躍など1930年代はチェコ演劇の最盛期となった。

当時のプラハを訪ねてカレル・チャペックとも会っているアメリカの演劇批評家ハリ・フラナガンはチェコ演劇の活発な状況に驚き、政治家や、市や、国家までが演劇に関心のあることに羨望すら抱いている。^{注4}しかし、ナチスの台頭により活動停止を余儀なくされ

た。第2次大戦後、社会主義のなかで演劇の組織は国有化され、1960年代に戦後の最盛期を迎えるが、またしても68年の悲劇「プラハの春」の事件で挫折。作家のクンデラや劇作家のヨセフ・トポル（1935-）、ヴァーツラフ・ハヴェル（1936-）、俳優・演出家オットマー・クレイチャ（1921-）らは活動を禁止された。

活動を禁止されたハヴェルは初め不条理劇を書いていたがプラハの春の挫折後、反体制活動家となり政治的・思想的エッセイで有名になった。戯曲『ラルゴ・デゾラート』（84年）は彼の代表作といえる。そしてビロード革命によって1990年彼は大統領に推され現在に至っている。

ハヴェル大統領は「演劇はつねに時代の精神的な中心にあらねばならない」と語ったが、これは単に彼が劇作家であったからだけではなく、チェコの歴史、プラハの歴史を振り返るとき民族復興運動の中、演劇や音楽がつねに民族意識を高め支えていたからにはかならないだろう。

◆20世紀チェコの舞台美術

チェコの歴史、文化を振り返って演劇や音楽と深く関わりあった民族であることはよく分かると思うが、それだけでPQ開催には繋がらない。

1936年のミラノ・トリエンナーレで当時のチェコスロヴァキアを代表する舞台美術家ヴラスチスラフ・ホフマン、フランチェスク・トロスター、ジャン・スラデックの3人が応用芸術の部門で主たる賞を受賞し大成功を収め、翌年1937年パリの国際博覧会では更なる世界的成功を収めた。第2次大戦前に欧州諸国が認める土台がすでに出来上がっていたと言える。

戦後、演劇組織が国有化されて1960年代には戦後の演劇最盛期を迎えた。ミラノ・トリエンナーレに引き続いて、1957年のサンパウロ・ビエンナーレでは戦前を上回る優れたチェコスロバキアの芸術家が現れ、彼らは1959年～1965年の演劇部門の主な賞を総なめにした。1958年には『ラテルナ・マギカ』と名付けられたパフォーマンスがブリュッセル万博のチェコスロバキア館で初上演、その劇空間と演出が驚異と話題的となった。

チェコスロバキアの舞台デザインの成功は余りにも異例だった。フランチェスク・トロスター、ヨゼフ・スヴォボダといった卓越した才能の舞台美術家が現れたために、サンパウロ・ビエンナーレの制度にのっとり、舞台美術の特性にこだわりを持ってプラハ・カドリエンナーレが1967年に設立された。これは時期的にスターリン批判の高まる中、「プラハの春」の思い切った民主化、自由化を推進している時期と一致する。またEXPO'58で世界的に認められ、20世紀を代表する舞台美術家ヨゼフ・スヴォボダは当時プラハ国民劇場の芸術技術最高責任者であったし、すでにイタリア、オランダ、ロシア、東欧諸国、ブラジルでも活躍し、その存在がPQ開催に大きくものを言ったことは間違いなく、演劇組織が国有化されているからには国をあげての取り組みであった。

PQ開催前年には第1回の国際舞台美術シンポジウムがチェコ教育文化省主催で開催され、PQ翌年にはプラハでInternational Organization of Scenographers, Theatre Technicians & Architects 通称 OISTAT を設立総会、1994年にアムステルダムに移るまで、プラハに本部事務局は置かれていた。

このようにチェコが舞台芸術の先進国であったことが分かる。

■チェコの誇る舞台美術家スヴォボダの背景

◆ヨセフ・スヴォボダについて

1920年 チェコスロバキア、ボヘミア地方チャスラフ出身、家具職人の息子として生まれる。

1931-35年 チャスラフの工業中学で学ぶ。

1935-38年 父のもとで、徒弟、職人。

1938-40年 家具職人になるためプラハの工業高等学校で学ぶ。

1940-43年 プラハの家具内装専門学校で学ぶ。

1943-45年 プラハの木工専門教育学校で製図等の先生を勤める。

1945-51年 プラハ産業芸術大学に学び、教授パヴェル・スメタナに師事。

1946-48年 プラハ5月5日劇場の舞台美術デザイン監督。

1948-50年 プラハ国民劇場の美術デザイン副監督。

1950-70年 プラハ国民劇場芸術・技術運営主任。

1970-79年 プラハ国民劇場主任美術デザイナー。

1973-92年 国立劇団【ラテルナ・マギカ】芸術監督。

1975-80年 スイス・ジュネーブ大劇場の技術顧問。

1969-89年 母校プラハ産業芸術大学の教授を勤める。(応用建築)

1973-92年 【ラテルナ・マギカ】芸術監督プラハ国民劇場芸術監督。

1980-84年 プラハ国民劇場美術デザイナー。

1992年 独立した【ラテルナ・マギカ】の芸術監督。

◇ 主な受賞歴は以下

1958年 EXPO '58【ラテルナ・マギカ】に対して大賞。

1961年 サンパウロ・ビエンナーレ海外舞台美術家金賞。

1967年 年間最優秀映画美術家としてイギリス批評家賞。

1969年 イギリス王立芸術大学の名誉博士号。

1970年 『三人姉妹』の映画美術に対しロサンジェルス批評家賞。(ローレンス・オリビエ監督)

1976年 International Theater Award 国際劇団賞 (ニューヨーク) パリにおいて勲一等文芸賞。

1978年 デニソン大学芸術博士号。(米国オハイオ州)

1984年 ウェスタン・ミシガン大学博士号。国際映画美術賞。(シアター・ヨーロッパ)

1986年 アメリカ劇場技術協会賞。

1987年 Academia di Belle Arti di Brera (ミラノ) 名誉会員。PQ'87 金賞。

1989年 ロイヤル・インダストリー会員。(ロンドン)

1993年 レジヨン・ドヌール勲章。(フランス)

以上が主なプロフィールであるが、永らく日本の多くの記録では彼が国立オペラ・プラハの美術監督とされていた。しかし、今回私が調べた資料によるとチェコ語の記録には Národní Divadlo Praha (国民劇場) とある。これを英文では The National Theatre と訳しているの、この英文を日本語訳して国立劇場 (Státní opera Praha) の芸術監督としていたようだ。プラハの3つの劇場の歴史的背景を知るとスヴォボダがどの劇場に勤務したかは多少気になる点であった。彼が芸術監督を勤めた国民劇場と常設劇場となった【ラテルナ・マギカ】は隣合って建っている。ただスヴォボダが劇場で働き出した頃には東欧諸国の多くがそうだったように演劇組織は国有化されていたので、Národní Divadlo も Státní opera も国家の助成で運営され、かつての劇場の対立やこだわりは減少していたはずだ。

年表で注目したいのが、専門学校の教師の職からプラハ芸術大学に入学し、その1年後には5月5日劇場(のちのプラハ国立劇場 Státní opera)の美術デザイン監督の職にも着いていることだ。劇場の仕事しながら大学を6年かけて卒業している努力家だ。大学卒業時には彼は30才、すでに国民劇場(Národní Divadlo)の芸術とテクニカルの両方の主任になって、彼のデザインプランは国民劇場のほか、当時のチェコスロヴァキアの主要な劇場だけでなく国内外で上演、活躍していた。

◆舞台芸術家スヴォボダの偉大さ

スヴォボダはチェコが誇る舞台美術家であると共に舞台照明家でもある。彼は国民劇場の美術だけでなく、舞台照明や舞台機構の技術を含む最高責任者であった。彼は常に照明効果を生かした舞台美術を考えていて、「光の魔術師」とも呼ばれている。一部の事典には舞台照明家、舞台美術家と紹介されているほか、次のような説明がある。

「照明、建築技師の資格を持ちプラハ国立劇場主任デザイナー、技術監督となる。チェコ・アバンギャルド演劇の伝統を踏まえた、オペラ、バレエ、ドラマの各ジャンルの舞台空間の処理は、作品への創造的解読力

の卓抜さにより、世界の驚異となる。照明、構造、機械学、数学、光学の機能を駆使し、58年のブリュッセル万国博覧会の【ラテルナ・マギカ】、67年のモントリオール万国博覧会の「ディア・ポリエ克蘭」方式では大変な話題を呼ぶ。舞台美術にセノグラフィー/scenography の用語を新造し、全上演空間の処理を強調した。」^{注5}

また他では舞台美術家とした上で、「照明を巧みに使い、映画の手法などを取り入れて舞台美術に新風をもたらし、[空間と光の詩人]と呼ばれる。【ラテルナ・マギカ】の推進者で、コンピューターの技術や新しい科学的な方法を駆使したモントリオール万国博覧会でのマルチプロダクションや『ハムレット』『かもめ』などの美術は有名である。」^{注6}

とこのように20世紀後半の革新的な舞台空間を生み出した偉大なアーティストである。彼はチェコ本国を中心にしながら海外のあらゆる種類の劇場も含め700作ほどの美術を制作しているほか、有名な劇場、映画監督との協力も数多く、劇場の技術面に関して幾多のpatentを所持していると言う。

代表作には世界の演劇界を驚かせた『オイディプス・レックス』(1963年プラハ国立劇場)は30フィートの幅の階段がほぼ舞台最上部まで設けられ、階段には動く部分がありコーラスや主要な人物が演技する場が作られた。またその階段は半透明で、下に演奏者がいて音楽が階段の下から聞こえてくるよう工夫されていた。日本にも宝塚歌劇団の有名な大階段があるが、それとは目的も趣向もことなるものだ。演劇史の1頁に残る舞台空間でもある。

現在の日本においては舞台美術家と舞台照明家はほぼ独立した関係にあるが、かつて舞台の照明は舞台美術の中に含まれていたし、西欧諸国では舞台美術と照明を兼ねるデザイナーは少なくない。スヴォボダは国民劇場のバックステージ総責任者の立場を生かして舞台照明、舞台機構、構造、機械学、数学、光学を駆使して実験的な舞台空間を提案し、単に舞台美術のジャンルの革命だけでなく演劇を歴史的に見ても、舞台美術と演出のより密接な関係、演出概念の変革をも表現している。

そこに彼への世界的に高い評価があると私は考える。

◆映画に見るスヴォボダ作品

スヴォボダはテレビ美術・映画美術も手がけている。前述の受賞の数々の中、ローレンス・オリビエが監督したチャーホフの戯曲「三人姉妹」で、舞台のみならず映画美術でもその実力を発揮したことが分かる。

彼の舞台美術作品を日本で見ることはままならないが、映画作品で意外にもたやすく見るものの出来るものがある。ミロス・フォアマン監督の『アマデウス』がそれだ。フォアマンはチェコ人で最も成功した監督、『カッコーの巣の上で』『アマデウス』両作品でアカデミー賞を受賞している。『アマデウス』では中世の街並のそのほとんどをプラハで撮影、スヴォボダは映画の中で登場するオペラシーンの美術をデザイン監督した。『ドン・ジョバンニ』はプラハの等族劇場 (Stavovské Divadlo) で1787年初演されていることは先にも述べた。モーツァルトの生涯を描く映画の舞台シーンを監督フォアマンがモーツァルトが実際に指揮を振って初演を果たした劇場で、チェコが誇る世界的な舞台美術家スヴォボダに依頼して撮影したことにチェコ人としての誇りと魂が伺える。

◆スヴォボダ美術の特徴

さて、スヴォボダの舞台美術の特徴であるが、舞台美術の背景画は歴史上長い間、布やパネルといったものに描かれ続けていた。しかし、スヴォボダは立体的な構成舞台の中に、絵画的な表現をスライド映写機や映画的手法で次々に写し出し、変化させる舞台美術を創りだした。多種多様な作品の中で、省略された舞



・オペラ「La Traviata」1992
鏡を全面に使った舞台美術

台空間の中に巧みに使われたスクリーンや巨大な鏡や床との境目のないようなパネルに次々に写し出されるスライドや映像。単なる造形美だけでなく、光と影を常に意識して照明を駆使している。ジンマーマンのオペラ『兵隊』は顕著な成功例だ。

そしてもう一つ彼の美術の素材でよく使われるのが鏡である。舞台上でミラーをうまく使用するのは難しい。それも舞台空間を取り囲むように使われたり、カーブしたミラーに映像を映し出す技術開発など、舞台美術家の域を越えて、科学者の領域で実験開発している点に彼の偉大さがあり、本国より他国の博士号や受賞の数々がそれを物語っている。

1960年代に東欧の街で上演された演劇やオペラが世界的な規模で影響を与えた事実。当時チェコスロバキアはソ連に次ぐ社会主義国であり、現在のようなIT情報の同時性のやり取りがあったはずもないのに、スヴォボダの仕事の評価は高まるばかりであった。

◆劇場技術開発者

彼が劇場の仕事に着いた頃は照明器具が、まだまだ未熟な時期で彼が理想の舞台美術、劇空間を表現するためには舞台照明器具の開発が必要であった。ハロゲンランプのない初期の段階にロウボルテージのスポットライトを開発した後、舞台用スライドプロジェクターや特別なスクリーンの開発、映写機を搭載した照明会社 [PANI] や多様な舞台の幕を創っている [GERRIETS] と言った企業と協力して技術開発をしている。彼の舞台でのライティングはスヴォボダライトと呼ばれる、独特の空間表現で世界中の照明家のあこがれでもあった。

考えてみてほしい、映画館は今だに暗い中に見るが、スヴォボダが表現した舞台空間には当然役者やオペラ歌手がいて登場人物に明るい照明を当てながら、スライド映写機によるリアルな写真や映像、または幻想的な表現をするには当時は大変な技術を要したはずだ。

余談であるが、毎年世界数十ヶ国にむけて放送されるアメリカ・アカデミー賞の舞台装置は大規模なもので、舞台機構と舞台装置、カメラワークを巧みに計算し、見事な舞台装置転換を見せてくれる。特に2000年度のアカデミー賞の舞台美術はスヴォボダがモント

リオールで話題をさらった「ディア・ポリエクラン」の企画を最新のコンピューターを駆使して、進化させたような舞台美術であった。今でこそコンピューターで容易に映像処理が出来るが、30年以上も前に東欧の小国で実践されていたことに新たに驚かされる思いであった。

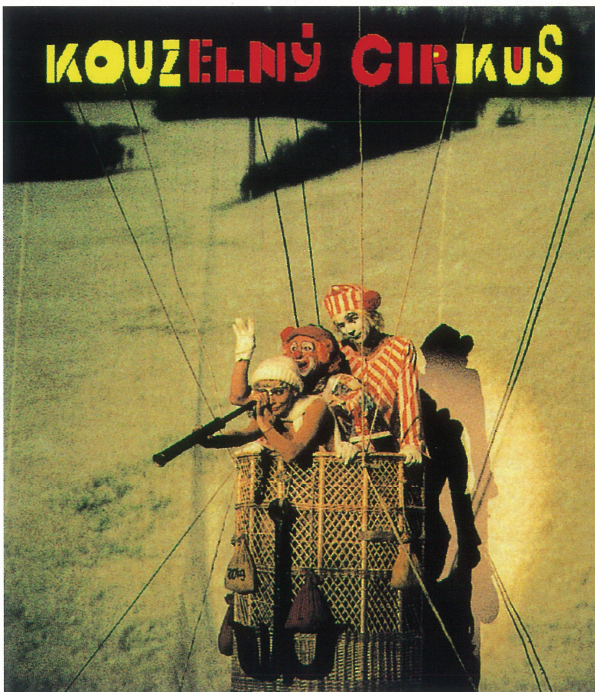
◆スヴォボダが創った舞台芸術—ラテルナ・マギカ

国民劇場や国立オペラ劇場でオペラや演劇の美術を制作する傍ら、彼が監督する【ラテルナ・マギカ】の実験的な舞台芸術の存在は重要だ。【ラテルナ・マギカ】は日本語で【魔法のランタン】となる。世界のどこでも見られない演目でシネ・バレエ、パントマイム、演劇、舞踏が演じられる。一言で言うなら「映像と演技者の共演するパフォーマンス劇団」といってよいだろう。

1958年のブリュッセル万博で初演、当時タイトルそのものが【ラテルナ・マギカ】であった。この時すでに国民劇場の芸術技術監督であったスヴォボダと演出家で友人のアルフレード・ラドック（1914—1976）らによって推進された前衛実験的劇団である。翌年プラ

ハでも上演され、1970年の大阪万博でも上演された。筆者は大阪万博は体験しているが、残念ながらチェコスロバキア館に入った覚えはなく、実際に見た人によると「今、演技者がいたかと思うと映像が映し出されて、さっきまでの演技者が映像となって演じていたり、映像からすり抜けるようにして実物の人間（つまり演技者であるが）が登場したりと、当時の日本人の目には好奇的に映った」という。1959年以後、常設の劇場をプラハのアール・デコ建築アドリア宮殿に設け実験的即興劇を映像などマルチ・メディアを駆使して上演する方法はプラハの名物となり、ヨーロッパ中に知られる所となった。

1958年万博での【ラテルナ・マギカ】の初演では彼は美術デザイナーであったが、1967年モントリオール万博ではスヴォボダ自身が演出をしている。『シンフォニー』『メタモアファセス』『ポリヴィジョン』の3つの作品を上演し、「ディア・ポリエクラン」方式と呼ばれ話題になった。現在の演目には『ザ・ワンダフルサーカス』や『パズル』『オデッセウス』『カサノヴァ』などがあり、スヴォボダの演出作品もある。現在は国民劇場の裏手に新しいガラス張りの劇場が建てられ、プラハの名物パフォーマンスとなって観光客も多く見られる。



・ラテルナ・マギカ「The Wonderful Cirkus」の舞台

◆舞台芸術教育者

また彼の舞台芸術教育における貢献度は極めて大きい。プラハ・カレル大学、チェコスロバキアの首都であったブラチスラバ演劇学校に「舞台美術」の科目を創設している。そして母校の大学では20年に渡り教壇に立ち、建築学科にスヴォボダ・スタジオを置いて後身の教育に努め、スタジオからは多くの優秀な人材が巣立っている。

第3回のPQから始まったスクールセクションの開設もまた、彼の貢献によるものが大きい。当初はごく少数の学校参加であったが、今やプロフェッショナル部門と並ぶPQに無くてはならない部門に成長した。PQを開催し続けることによってスヴォボダはチェコに暮らしながら、世界の舞台美術教育者を刺激し、動かし影響を与え続け、各国の舞台美術教育の成長を促成したとも言えるのではないだろうか。

◆PQ開催以後のスヴォボダ

民主化の勢いに乗ってチェコの誇りと叡知をかけて開催されたPQ、その開催の年1967年はモントリオール万博の開催と同年であり、スヴォボダの名前を更に広く知らしめた。世間を驚かせたブリュッセル万博から10年がたった。しかし、PQ開催の年はスヴォボダにとってもチェコにとっても新たな20世紀の激動のオーバーチュアに過ぎなかった。翌年衆知のとおりソ連軍による軍事介入で「プラハの春」はあっけなく幕を閉じ、スヴォボダの良き理解者であり友人の演出家アルフレード・ラドック(1914-1972)らはチェコを離れ、多くの演劇仲間が活動禁止、投獄されることになる。しかし、67年のEXPO以降スヴォボダの仕事は一気に国外で増え、ヨーロッパのみならず世界各国で公演している。亡命も可能だったと推測できるが彼はプラハに止まり、その後も実験開発と新たな創造、大学での教育に勤め、毎回危ぶまれるPQ開催について20世紀末まで続け激動の20世紀を乗り越えた。

節目にふさわしいPQ'99の時点でも彼は健康で、6月10日プラハ国立劇場でイギリス、アメリカを代表する舞台美術家と3人で特別講演を行い、講演後スヴォボダの装置によるオペラ『トスカ』が上演された。

スヴォボダという人物の探求心の旺盛さと舞台芸術に対する愛情の深さに驚かされるし、世界中の舞台美術家や照明家、演出家から尊敬と畏敬の念を持たれるのも頷ける。

◆演劇組織の国有化のもたらしたもの

幾多の苦難を乗り越えねばならなかったプラハだが、スヴォボダが劇場で働く2次大戦後、演劇組織が国有化されたことは舞台美術、照明の主任の彼にとって幸いしたのではないだろうか？

国有化された劇場で働くことがブリュッセル万博の実験的【ラテルナ・マギカ】に繋がったであろうし、何より予算的に国がかりなのだから。劇場との契約での舞台美術家が少ない日本ではこのような実験は難しいことだ。国有化されたチェコの代表的劇場で技術開発に励み、理想的な劇空間を創作することが世界的舞台美術家を育んだのではないか。そして何よりPQを開催したことによって、4年に1度プラハに世界各国から舞台美術家や劇場関係者が集まり舞台芸術の文化

交流の場を設けた意義は計り知れないほど大きい。

チェコ文化が育てたスヴォボダは単に舞台美術家として記録されるだけでなく、演劇の歴史を振り返る時、アドルフ・アピア(1862-1928)やゴードン・クレイグ(1872-1966)ら、舞台芸術家の表現主義^{注7}、すなわち反自然主義理念が浸透した、またそれを実践発展させた20世紀を代表する舞台美術家であり、舞台芸術家として記録されることだろう。

■まとめ

チェコの国民の間で繰り返えられるスローガン「小さい国が存在していくためのたったひとつの保証は大きな文化を持つことである」と民衆の心の中に深く植えつけられていると言う。この国民性でもってチェコの誇る舞台芸術の文化を広く世界にアピールするにはPQの開催はまたとない機会であったはずだ。

「黄金のプラハ」は幾多の試練があったが、ビロード革命で平和を取り戻し、今も中世の街並みが残された美しい街だ。その地で開催されるPQは舞台美術家にとって、目的であり名誉であり誇りであり、まるで聖地へ巡礼するかのような赴きがある。政治的軋轢のない独特の平和を象徴する展覧会だ。

PQが開催されるまでは南米ブラジル、サンパウロでのビエンナーレに一部の舞台美術家達の作品が展覧されるに過ぎなかった。舞台美術というジャンルにこだわった展覧会を舞台芸術の歴史あるヨーロッパで開催する意義、開催地プラハは地理的にも歴史的にも文化的にもヨーロッパの十字路。開催当時の民主化のエネルギー的にも絶好の街であった。

チェコ民族意識の衰退からチェコ人のアイデンティティを取り戻し、民族意識を高めたチェコ語による演劇やオペラ、チェコ語演劇によるチェコ語の標準語化、チェコの国民にとっての舞台芸術の重要性。また古くから音楽の都として栄えオペラが盛んに上演されれば、劇場設備や舞台美術、技術が向上されることとなる。音楽の都の基盤がやがて劇場美術の発展にもつながったと推測出来る。このような土地柄は優れた舞台美術

家を育むことに繋がるのではないだろうか。優れた舞台美術家の豊富な人材、そしてチェコの誇るスヴォボダの登場。

戦後の1960年代は世界各地で新しい芸術文化が華開き、劇場にも押寄せた時代であった。ヨーロッパ各地で国際的な演劇祭が開かれ、演劇の演出は柔軟に変化した。演出と舞台美術デザインはより密接に視覚的に創造を始め、劇場は次々に新しく建てられ多目的な劇場施設が登場した。歴史的に見て世界の劇場の重要な変化がこの時期に起こった。

ロンドンやニューヨークと言った派手さはないが、それ以上に国際舞台美術展の開催に相応しい街ではないか。このような要因が重なり合って1967年プラハ・カドリエンナーレの幕は開いた。

今回はPQのキヤマンであるスヴォボダの上演演目から彼の仕事を探してみたいと思う。

- 注1 カトリックの異端者ヤン・フス(1372頃~1415)を聖者とする宗教一派
注2 石川達夫「黄金のプラハ」平凡社 2000 62頁
注3 1922年4月の朝日新聞による
注4 ハリ・フラナガン著、北村喜八訳編「現代の欧州演劇」(日日書房/昭和6年)
注5 「日本大百科事典」小学館 1987
注6 「世界大百科事典」平凡社 1988
注7 1910年から1925年にかけて起こった演劇運動

引用・参考文献

- 「A MIRROR OF WORLD」 VĚRA PTÁČKOVÁ 著 1995
THEATRE INSTITUTE PRAGUE
「IN SEARCH OF LIGHT」 1995 THEATRE INSTITUTE
PRAGUE
「JOSEF SVOBODA」 UNION OF THE THEATRE OF
EUROPE FOUNDER GIORGIO STREHLER 著 1999
「アドルフ・アピア」相模書房/遠山静雄著 1977
「ゴードン・グレイグ」平凡社/エドワード・グレイグ著 1996
「演劇の歴史」朝日出版社/フィリス・ハートル著 1984
「ポケットのなかのチャペック」晶文社/千野栄一著 1975
「STEGE DESIGN THROUGH THE WORLD SINCE 1935」
1956
「STEGE DESIGN THROUGH THE WORLD SINCE 1950」
1964

INTERNATIONAL THEATRE INSTITUTE

- 「タビト6・プラハ」「ワールドアトラス」「望遠郷10・プラハ」
1995 同朋舎出版
「万有百科大事典3」1974
「世界大百科事典」平凡社 1988
「日本大百科事典」小学館 1987
「西洋演劇用語辞典」テリー・ホジソン著 1996
「中欧ポーランド・チェコ・スロヴァキア・ハンガリー」新潮
社 1996 沼野充義監修
「プラハ建築の森」学芸出版社/田中充子著 1999
「黄金のプラハ」平凡社/石川達夫著 2000
<http://www.hinix.com/oistat/>
<http://www.laterna.cz>